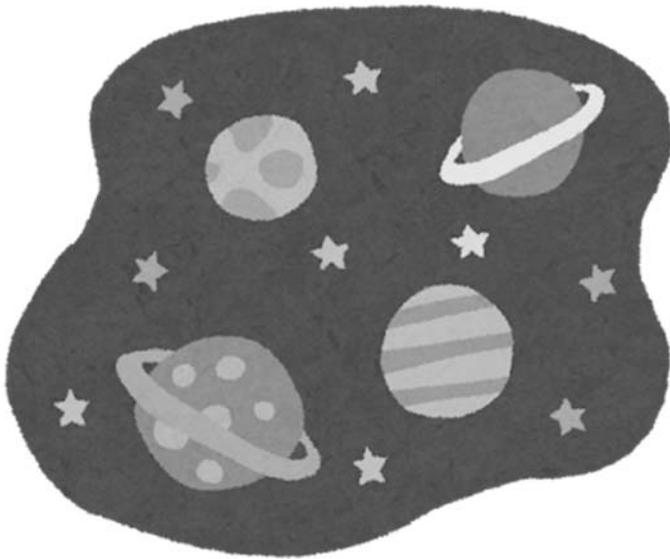


新潟県立大学

2016 年度卒業 / 2017 年度入学記念

どこでもドアのかぎ 2017



特集 地球の本 宇宙の本



ほんものの本と出会うために



ほんものの本の中には、たくさんのもものが詰まっています。

ほんものの本は、知識や理解を与えてくれるだけでなく、夢や、冒険や、驚きや、発見や、謎解きの楽しさや、感動や・・・とてもここには並べきれないほどの、数々の贈り物を私たちに与えてくれます。ほんものの本は、たとえ手のひらに乗るほど小さくても、一つの世界を、一つの宇宙を持っています。

数え切れないほどの本の中から、ほんものの本をみつけてほしい。一人でも多くの人に、しあわせな出会いをしてほしい。そう願いながら、みんなで知恵を出し合い、33冊の本をお薦めすることになりました。

ここにあるのは、33の世界です。そして、本の表紙、つまりその世界に通じる扉を開ければ、あなたはそのまま別世界に旅立てるのです。そう、まるで「どこでもドア」のように。

それでは、あなたの手で開かれるのを待っている扉たちをご紹介します。

新潟県立大学生生活協同組合
教職員フォーラム

どこでもドアのかぎ 2017 目次

Brown, Howard	(国際地域学部 国際地域学科)	3
山中 知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	4
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	5
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	8
福嶋 秩子	(国際地域学部 国際地域学科)	11
小澤 薫	(人間生活学部 子ども学科)	12
福本 圭介	(国際地域学部 国際地域学科)	13
黒田 俊郎	(国際地域学部 国際地域学科)	15
水上 則子	(国際地域学部 国際地域学科)	15

特集「地球の本 宇宙の本」

Brown, Howard	(国際地域学部 国際地域学科)	17
堀江 薫	(国際地域学部 国際地域学科)	18
山中 知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	18
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	19
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	23
黒田 俊郎	(国際地域学部 国際地域学科)	25

国際地域学部 国際地域学科 Brown, Howard

「達人」の英語学習法 —データが語る効果的な外国語習得法とは

竹内 理 草思社

ISBN-13: 978-4794216519

This book is highly recommended for all language students. Excellent advice based on current research about how to study and learn languages.

原発避難と創発的支援： 活かされた中越の災害対応経験

高橋若菜編著;田口卓臣,松井克浩著 本の泉社(2016)
本体 1,500 円+税

「BOOK」データベースによれば、【十数万人もの避難者を生みだした福島原発事故。この未曾有の事態にいち早く対応し、次々に有効な支援を打ち出した地方自治体があった。かつて、中越・中越沖の震災を経験した新潟県である。行政・中間支援組織をあげて、原発避難者の声なき声に耳を傾けた新潟県の全面的なサポート体制は、「支援とは何か」、「危機に立ち向かう知恵とは何か」を私たちに問いかけてくる。「ビッグブッダハンド」、「底辺ガバナンス」、「エンパワーメント」—過去の災害対応体験から編み出された豊かな経験知の現場に迫る。】

お母さんを支えつづきたい： 原発避難と新潟の地域社会

高橋若菜,田口卓臣編 本の泉社(2014)
本体 600 円+税

新潟市を舞台に、福島から避難してきたお母さんやお母さんを支え続ける地域社会の姿を、インタビューや手紙を通して紹介したブックレット。私の研究室に來れば興味のある学生には、この本をさしあげます。

「中つ国」歴史地図 トールキン世界のすべて

カレン・フォン・フォNSTADT 琴屋草（翻訳） 評論社(2003)

ファンタジー小説はたくさんありますが、実は、私はあまり好きではありません。なぜなら、ライトノベルから RPG のゲームに至るまでのほとんどのファンタジーは、トールキンの『指輪物語』と、C.S.ルイスの『ナルニア国ものがたり』とを足して2で割って、ちょっと味付けを変えただけのものだからです（私の偏見ではありますが）。これにギリシア神話と北欧神話をつけくわえれば、世のファンタジーはほとんど網羅できてしまいます。これ以外のファンタジーを探そうとおもったら、水上先生がご専門のロシアのフォークロアや、日本を含むアジアの神話をベースにしたものを探さないとなりません。しかし、そうした作品は多くはないのですね。

で、中つ国の地図です。トールキンの『指輪物語』の登場人物たちの動き、物語の展開が、事細かに地図上にプロットされています。それも、ものすごくリアルに。この地図を作ったフォNSTADTさんは、綿密かつ詳細に物語を読み込んだのでしょ。そしてまた、原作の物語も、そうした読み込みに耐えるだけのリアリティを持っていたということです。では、作品のリアリティは何によって決まるのでしょうか。それはおそらく、一つの作品を貫徹する合法則性です。設定がいかに荒唐無稽であっても、その世界の中に一本の合理性の心棒が通っていること。だれか、こうした雄大でかつ合理的で一本の法則に貫かれた、それでいて荒唐無稽なファンタジーを書いてくれないものでしょうか。上橋菜穂子さんの作品など、それに近いかも。

入手はむづかしいかもしれません。本書をご覧になりたい人は、石川研究室まで。

十七世紀のオランダ人が見た日本

クレインス・フレデリック 臨川書店(2010)

アムステルダム大学の重厚な赤煉瓦の建物は、ヨーロッパでも有数の風俗街と路地一本隔てて立っています。煉瓦の目地は覆輪目地で、積み上げられた煉瓦も割り型のある立派なものです。実は、この建物は、17世紀初頭に設立されたオランダ東インド会社の本社でした。

長崎の出島からは、商品や収益金のほかにも、多くの報告書がオランダに送られました。クレインス・フレデリック氏の著書は、そうした報告書群から17世紀のオランダ人の日本理解を研究した力作です。翻訳者名が書かれていないのに気づきませんか？ 実は彼は、京都にある国際日本文化研究センターの准教授で、この本は彼が日本語で書き下ろしたものです。

面白いのは、この本の第5章で紹介されているモンターヌスの『東インド会社遣日使節紀行』（1669年）という書物(Arnoldus Montanus, Gedenkwaardige gesabtschappen der Oost-Indische Maatschappy in 't Vereenigde Nederland, aan de kaisaren van Japan. Amsterdam: Jacob Meurs, 1669.)です。モンターヌスという人物が、日本に来たこともないのに、観たこともない日本の風景・人物・物産を絵にして出版しているのです。それがとんでもない絵なのです。

モンタヌスが描いた驚異の王国 おかしなジパング図版帳

宮田珠己 パイ インターナショナル(2013)

クレインス・フレデリック氏の扱ったモンターヌスの著書からの珍妙な日本図を集めて解説を付けたのが、宮田さんのこのご本です。同じ古文献を扱いながら、これほどまでに対照的な分析・紹介の書物が出来上がるというのもまた面白いのですが、とにかくモンターヌスの掲げる絵がすごい。これは見てもらわないとわからないかもしれないかもしれません。日本の軍船がローマのガレー船みたいに描かれていたり、今は無き京都の方広寺の大仏が、グラマラスな女性の裸体をしていたりします。巨大な魚の口から姿を現す観音像や、東南アジアのパゴダのような大阪城。こうした珍妙な図は、これよりもまだ正確だとされるケンペルの『日本誌』でも五十歩百歩だったようです。とにかく、絵を見てびっくりしてください。面白いですよ。

レンブラントと和紙

貴田庄 八坂書房(2005)

日本から輸出されていたものの中でも興味深いのが、和紙です。なんと、レンブラントの銅版画の多くが、日本製の和紙にプリントされているのです。この和紙がいつ長崎から船積みされて、どういう経路でレンブラントのもとに届いたのかも、文献から実証できます。この伝統は今でも続いていて、ヨーロッパの版画家の多くが、今なお重要な作品には和紙（特に雁皮紙）を用いているのだそうです。

それ以外にも、この本を読むと、銅版画の各種の技法についても知ることができます。プリントした際に銅版画に現れる技法による表情の違いであるとか、あるいは技法によってプリントできる枚数に違いがあることもわかります。最も興味深いのは、銅版画を制作する際に画商と結ぶ契約の違いです。詳しくは、本書をよんでください。

テロ

フェルディナント・フォン・シーラッハ 酒寄進一訳
東京創元社(2016)

満員のサッカー場に飛行機が一機、向かっていく。テロリストがハイジャックし、大観衆のスタジアムに突入しかけていたのだ。追尾にあたったドイツ空軍機のパイロットは航空機撃墜の判断を下す。本書はこのパイロットの行為をめぐる裁判風景を淡々と描いていく。

テーマはいたってシンプルだ。大勢の人を救うためなら「多少」の犠牲を払うことは許されるのか否か、である。数年前に出版されたこの戯曲は、ヨーロッパで大きな話題となり、各地で上演されたという。911 後にもよく語られたが、古臭くも感じられるこのトピックが、なぜこれほどにも話題になるのか。このことにまずは驚かされた。読み進めていくなかで次第に理由が明らかとなる。

そして、撃墜をめぐる審議が大詰めにくると、判決を前に緊張が高まっていった。読み終わって本を閉じ、しばらくボーッとしていたように思う。数年前に紹介したウエルベクの『服従』と同じく、心がぐっと沈みこんでいく感覚だ。みじめな時代が眼前に横たわっているのを見せられた感覚とも言えるだろうか。ツヴァイクやロートの本のように、ヒトの墓標が打ち立てられた気がしてならない。

ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語

津島佑子 集英社(2016)

この一年、出会えたことに感謝した作品は3つ。英国人ブルース・チャトウィンの『ソングライン』、蘭嶼（台湾）の漁師シャマン・ラポガンの『冷海深情』、そして津島佑子の『ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語』だ。どれも未知の世界であり、うまく語る言葉がなかなか見つからない。ここではパタゴニアの探検家チャトウィンを敬愛し、ラポガンの友人だった津島佑子の作品についてふれた。津島は昨年2月に亡くなり、『ジャッカ・ドフニ』は死後出版された。

ちょうど船戸与一の『蝦夷地別件』を読んでいたとき、『ジャッカ・ドフニ』を知った。この作品にも北辺の多様な先住民が登場する。時代はキリシタン弾圧が激しかった16世紀終わり、蝦夷地から長崎を経て、マカオに向かうアイヌの幼女が主人公だ。400年も昔の話と思うかもしれないが、そうではない。9年前の冬、長崎を訪れていたとき、ちょうど列福式と呼ばれる殉教者名誉回復の儀が執り行われていた。冷たい雨が降る初冬のことである。大きな球場にどンドン人が吸い込まれていき、電車の中からスタンド上段まで人が埋め尽くす光景を目の当たりにした。津島は今に伝わるこの時代のキリシタン弾圧に、アイヌ女性の人生を重ね合わせたのである。北から南へと向かう少女が口ずさむハボ（母）の子守歌は、赤道すらも越えて響き渡る。柄谷が評したように、津島の『黄金の夢の歌』（講談社、2010）とならび、桁外れの作品としか言いようがない。

嘘つきアーニヤの真っ赤な真実

米原万里 角川書店(2001)

この一年で最も笑った本は、1960年代前半、プラハで少女時代を過ごした米原万里のエッセイだ。出版からもう15年になるが、この人気エッセイをようやく手に取ることができたのはうれしい（以前、ここで紹介されていて本書を知ったのではなかったか）。ロシア語の国際通訳として冷戦とソビエトの崩壊を見守った万里さんは、共産党幹部の娘としてその幼少期を過ごしている。このエッセイの主な内容は、プラハのソビエト学校で出会った3人の少女との交遊録だ。ボスニア出身のムスリム系ルーマニア人、ユダヤ系のユーゴスラビア人、ルーマニア生まれのギリシャ人。頭がこんがらがりそうになるが、とにかく面白い。数年後にこの地で同じような幼年期を過ごした小森陽一のエッセイでもうかがえるが、今ではとうてい考えられない時代の妙味がある。実際、こうしたピリピリとした世界の状況だからこそ、ちょっとしたねじれやずれの瞬間にとてつもないユーモアが生まれるし、人間味豊かな関係が生まれたりもする。タフな時代におけるユーモアの強靱さを、まざまざと見せつけられた。

我輩は猫である

夏目漱石

漱石の思い出

夏目鏡子述・松岡譲筆録 文春文庫
680円＋税

最近思い立って「我輩は猫である」(1)を読み始めたら、これが面白い。朝日新聞で連載しているからではない。最初のきっかけは、漱石夫人が語った漱石の思い出をつづった本(2)を読んだことである。さらにそうしようと思った理由は、その本を映像化したドラマを見たからだ。ドラマを見てしまったあとは、漱石も鏡子夫人も、それを演じた俳優のイメージから抜けられないというのは困ったことだが、この順序で読んだおかげで我輩が語る世界の色合いが全く変わって見えてきた。漱石の家が「猫」の家であった。私小説ではなかったにしても、道具立ては漱石の身のまわりにあることだったのである。猫が垣間見た人間界の話という意味では、「地球の本・宇宙の本」に入れてもよいと思ったが、(2)もあわせて紹介したかったので、一般の方に投稿する。

今読んでいる「我輩は猫である」は、「坊ちゃん」が抱き合わせに入っている五十年以上前に出版された日本文学全集の一巻である。一通り読んだはずだが、あまり頭に残っていなかったのは、十やそこらの子どもには到底理解できない世界だったんだろうと今ならわかる。せつかくのユーモアも、話題の背景についての知識がないと笑えもしない。もう一つ、今面白がっている理由は、百年以上前の東京で使われていたやや古めかしい日本語が読めるからである。今は絶滅したかに見える「～さ」や「～ぜ」のような表現や消えた生活語(「後架(=便所)」など)が普通にでてくる一方、漢文書き下し文の言い回しや難しい漢語が使われている。漱石のルビや漢字の使い方を調べることで、まだ固まっていない当時の日本語の表記を研究している人もいるくらいである(今野真二の一連の著作)。まずはストーリーやテンポを楽しんで、あとからことばに気をつけながらまた読みなおしてみようかと思っている。

コンビニ人間

村田沙耶香 文藝春秋社

「(出張先などで) コンビニがないと落ち着かない」という友人がいて、あまりピンとこないでいたけれど、コンビニ自体にすごい親しみがわきました。画一的で機械的な場所ではなく、とても人間的な空間であることがわかりました。いまの日本社会がここに凝縮されていると思いました。自分自身にとっての「仕事」や「働くこと」、他の人にとってのそれらを主体的に、客観的にみることができるかもしれません。

うつろうもの のこるもの

編集・企画・発行：Bricole（楳沢和典・楳沢厚子）（2016）

本当に素敵な本。手に取った瞬間から、「すばらしい」と直感した。思想とスタイルが一貫していて、手にした瞬間から伝わってくるものがある。本の形や感触、光の色や温度からも。そして、ページを開くと、そこには世界があり、「未来」が息づいている。小さな、本当に、素敵な本。ぜひ、皆さんに紹介したい。

本の中身は、角海浜（かくみはま）という新潟の西蒲区にある過疎の村（巻原発の予定地だった）を中心に地域の写真を撮り続けた写真家・斉藤文夫さんのインタビューと、斉藤さんを囲んで開催された「いろり座談会」の記録が中心になっている。座談会には、映画『阿賀に生きる』の制作にかかわった個性あふれる面々も参加し、とにかく、斉藤さんやいろりを囲む方々のストーリーがすばらしい。そして、魅力的な写真の数々。どんなふうにこの本を伝えたらいいか。もういっそ、素敵な写真たちも含めて、全部まるごとで、一編の「詩」であるとしてしまおうか。でも同時に、ここには、複数の詩があり、ストーリーがあり、世界がある。人間が生きること、生き方、皆がそれをずっと語っていて、その「声」がすばらしいのだ。過激なグローバリゼーションの時代に、土地と自然に根をはりながら、いま人としてここに生きること、その方向性、強度、「のこるもの」…

ああ、言葉がたりない。ぜひ、手に取ってほしい。この本は、実は、県立大学でお仕事をなさっている楳沢さんの手によるものだ。すぐそばに、こんな仕事をなさっていた方がいたなんて！ 新潟は、奥が深くて、ドキドキする。

ウシがゆく—植民地主義を探検し、私をさがす旅

知念ウシ 沖縄タイムス社(2010)

シランフナーの暴力—知念ウシ政治発言集

知念ウシ 未来社(2013)

私は、最近、「植民地主義」という言葉をだんだんリアルに感じるようになってきました。私は、しばらく前までは、この言葉を、あくまで「比喩」として使っていたように思います。しかし、今は、それは確かに現在も存在している現実だなどと実感しています。そして、いま、私たちの周りに広がる「貧困」、「差別」、「戦争」といった現象も、じつは、背後にばらばらに見ていたのでは分からない構造があって、それは、この「植民地主義」に関係しているのではないかとも思っています。この「植民地主義」という言葉がリアルになったきっかけは、沖縄からの叫びです。「普天間基地移設問題」とは何なのか？ここで紹介する知念ウシさんは、これは植民地主義の問題であると言います。昨年、ウシさんを新潟にお招きし、シンポジウムを開催しました。沖縄からの「県外移設」の声、それはまぎれもなく「もう植民地主義はやめてほしい」という沖縄の人々の叫びなのだと分かりました。政府は今、辺野古の海で基地建設を強行しています。しかし、私は、この沖縄の声に応答することこそが、私たちが真の「自律性」を回復する道、私たち自身をも苦しめている植民地主義を自ら脱していく道につながると考えています。皆さんは、どう考えるでしょうか。知念ウシさんは、今、沖縄で最もすどい生きた言葉で植民地主義を論じる女性の物書き（むぬかチャー）です。皆さんの感想を聞かせてください。

意味がなければスイングはない

村上春樹 文春文庫

新刊が話題の村上春樹の音楽エッセイ集。『ポートレイト・イン・ジャズ』（新潮文庫）と並ぶ私の愛読書です。『ポートレイト〜』がジャズの名盤セレクションなのに対して、本書は、本格的な音楽評論になっています。収録の全10編どれも読み応えがありますが、強いて挙げるならば、「ゼルキンとレービンシュタイン、二人のピアニスト」と「国民詩人としてのウディー・ガスリー」かな？前者がヨーロッパ、後者がアメリカの社会文化論としても秀逸です。あと音楽つながりで、おまけとしてはっぴいえんどのギタリスト鈴木茂の自伝（『鈴木茂のワインディング・ロード』リットーミュージック）を紹介しておきますね。はっぴいえんどのデビュー作でそのギターを聴いて以来のファンなので。

天国でまた会おう（上・下）

ピエール・ルメートル 平岡敦 訳 ハヤカワ文庫(2015)

第一次世界大戦については、世界史で習う程度のことしか知らなかった、というのが正直なところ。「赤毛のアン」シリーズの最後のほうでの描き方（決して賛美されているわけではありませんが・・・）から、なんとなく、紳士的な戦争のようなイメージを持っていたりしました。この本を読んで、そのイメージは、主人公の顔と一緒に吹き飛ばされました。圧倒的な理不尽と、それを巧みに利用する者と、それに必死で抗う者たちを、時に軽すぎるような文体で描くと、こんなに残酷でありながら魅力的な小説ができあがる・・・怖い話なのですが、読んでよかったです。

特集

地球の本 宇宙の本

空の青さを見つめていると
私に帰るところがあるような気がする
(谷川 俊太郎)

国際地域学部 国際地域学科 Brown, Howard

宇宙飛行士が教える地球の歩き方

クリス・ハドフィールド 千葉 敏生 早川書房
ISBN-13: 978-4152095237

An Astronaut's Guide to Life on Earth

Chris Hadfield Pan Books ISBN-13:978-1447259947

Chris Hadfield is Canada's most experienced astronaut. He lived for six months on the International Space Station. His life in space taught him many interesting lessons about life here on Earth and he shares those lessons in this book. He has some very good advice for all of us about creativity, determination, and preparation.

わたしを宇宙に連れてって—無重力生活への挑戦

メアリー・ローチ 池田 真紀子 NHK 出版
ISBN-13: 978-4140815083

Packing for Mars: The Curious Science of Life in the Void

Mary Roach W W Norton ISBN-13: 978-0393339918

In this book, Mary Roach explores our history of life in space. But this is not a book about heroes and astronauts. It is a book about how people live a very human life in space. Roach's writing style is funny and serious at the same time. Parts of the book will make you laugh, and parts will make you think.

地球進化 46 億年の物語 「青い惑星」はいかにしてできたのか

ロバート・ヘイゼン 円城寺守監訳、度会圭子訳
講談社（ブルーバックス）

地球表面に生きている私たち人類を含む全ての生命体も、地球を形成する物質でできています（生物は、炭素、水素、酸素、窒素などの比率が高く、岩石は、ケイ素その他の比率が高いという違いはありますが）。この本には、地球内部の活動により生物が大きな影響を受けてきた一方で、生物の活動によって生態系も岩石も変化してきたことが、「生物と無生物の共進化」という表現で述べられています。人を大切に、地球も大切に。

国際地域学部 国際地域学科 山中 知彦

宇宙船地球号操縦マニュアル

バックミンスター・フラー ちくま学芸文庫(2000)
本体 900 円＋税

特集の「地球」と「宇宙」の両キーワードがヒットする題名の本。「BOOK」データベースによれば、【20 世紀を代表する技術家、バックミンスター・フラーが遺した記念碑的著作の新訳。地球を一つの宇宙船と捉える彼の刺激的な発想は、人類が直面している全地球的問題の解決に示唆をあたえ、またエコロジー・ムーヴメントやインターネット的思考を生むきっかけにもなった。『現代のレオナルド・ダ・ヴィンチ』（マーシャル・マクルーハン）といわれているフラーのメッセージは、私たちに発想の大転換を迫り、新たな思考回路の形成を強く促す。】原著は、R.Buckminster Fuller “Operating Manual for Spaceship Earth” (Southern Illinois University Press, 1969) で、私は大学時代にダイヤモンド社刊で読んで、そのカッコよさに惚れたもの。

プトレマイオス世界図—大航海時代への序章— Clavdii Ptolemaei COSMOGRAPHIA TABVLAE

L.パガーニ（解説）、竹内啓一（翻訳）
織田武雄・高橋正・船越昭生・増田義郎（日本語解説）
岩波書店(1978)

成田を発ってアムステルダムに向かう KLM 機が、北極海の縁をかすめて今しもロシアからフィンランドの国境を越えようとするころ、機内放送の音楽チャンネルからヘッドフォンを通して流れてきたのは、シベリウスの組曲『カレリア』の終曲「行進曲」でした。まさか、飛行機の位置情報が曲目とシンクロしていたわけではないでしょうが、感慨深いものがありました。なぜなら、フィンランドのカレリア地方は、叙事詩『カレワラ』の多くの詩句が採集されたフィンランドの中のフィンランドともいえる地域でありながら、現在は国境のロシア側だからです。

しかし、『プトレマイオス世界図』にはバルト海より北は描かれていません。フィンランドもノルウェーもスウェーデンも描かれていないのです。西はアイルランドまで。東はヒマラヤ山脈の東側に「これより東は中国」という記述だけ。南はアフリカのエチオピアまで。それ以外の地域は世界の外だったのです。

ヴィトゲンシュタイン（20世紀前半のオーストリアの哲学者）にいわせれば、世界というのは「事柄」のすべて。「事柄」は語りえないといけません。つまり、知識の限界が世界の限界、というわけです。このプトレマイオス世界図が示しているのは、15世紀のヨーロッパ人の認識していた世界のすべてだったと言っているでしょう。

ところで、プトレマイオス（ギリシア語ではΚλαύδιος Πτολεμαῖος、ラテン語では Claudius Ptolemaeus,）は2世紀のエジプトで活躍したギリシア人です。どうしてこれが15世紀末の「大航海時代」と関係するのでしょうか？ 岩波の復刻の原本は、ナポリ国立図書館の所蔵する15世紀の写本です。1900年前のギリシア人学者は15世紀に入るまで西欧世界では忘れ去られた存在でした。認識されている物事の総体が世界であるなら、プトレマイオスは、1300年の間、世界の外に置き去りにされていた、ということになります。ギリシア語で書かれて

いた地名がすぐさまラテン語訳され、この 1300 年間に発見された地域が書き加えられた写本が作られます。それがこの原本となります。プトレマイオスが再発見された時はまさに大航海時代。この地図に書かれていない未知の世界へと、船乗りたちは旅立っていきます。そのあとどうなったかは、植民地支配の歴史が明らかにしている通りでした。

40 年前の古本です。入手は困難でしょう。本書をご覧になりたい人は、石川研究室までおこしてください。

天体の回転について（1543年）

ニコラウス・コペルニクス 矢島祐利 岩波文庫

無限、宇宙および諸世界について（1584年）

ジョルダノ・ブルーノ 清水純一 岩波文庫

ケプラーの夢（1608年）

ヨハネス・ケプラー 渡辺正雄・榎本恵美子 講談社学術文庫

星界の報告（1610年）

ガリレオ・ガリレイ 山田慶児・谷泰 岩波文庫

天文対話（1632年）

ガリレオ・ガリレイ 青木靖三 岩波文庫

まとめて5冊ご紹介しましょう。宇宙の本です。しかし、「科学的」といえるかどうか？ コペルニクスもケプラーも、占星術のための正確なホロスコープを作ろうとして天体観測を続けていたからです。星占いは当然のことながら近代の天文学には直結しません。しかし、こうした試みの中で地動説が徐々に形を整えていきます。ですが、カトリック教会の手前、それを大声では叫べません。それに、コペルニクスはカトリックの司祭でもありました。コペルニクスのこの本は、彼の死後に刊行されたものでした。

地動説を哲学的な議論として主張したのがジョルダノ・ブルーノでした。これが理由で、彼は異端審問で有罪の判決を受け、火刑に処されます。ガリレオは自ら改良した天体望遠鏡で木星の衛星を発見し、『星界の報告』という書物にまとめて、当時彼が仕えていたフィレンツェの領主メディチ家に献呈しようとしています。

しかし、惑星の周りを他の天体が回っているなどということは誰にも信じてもらえませんでした。そののちに著したのが『天文対話』です。この書作で今度はガリレオが異端審問にかけられます。「それでも地球は回っている」という彼の負け惜しみは有名ですね。

しかし、惑星が楕円軌道を運動していることに気づいていたのは、上に上げた4人の中ではケプラーただ一人でした。ほかの人たちはみな、惑星が円運動をしていると信じていました。ところが、近代天文学に一番近かったはずのケプラーは、当時知られていた地球を除く太陽系の惑星が5つであることと、正多面体が5つしかないことを結び付けて、何やら珍妙な神秘主義の学説を唱えてもいました。ここで紹介しているケプラーの本は、天文学の本ではなくて、子ども向けの月の世界のお話しです。SF小説の走りかも。

ケプラーやコペルニクスについてもっとしりたければ、ジョン・バンヴィルという作家が『ケプラーの憂鬱』と『コペルニクス博士』という小説を書いています（どちらも工作舎刊）。ベルトルト・ブレヒトというドイツの劇作家は、『ガリレイの生涯』というお芝居を書いています。こちらは岩波文庫。

あるときの物語（上下巻）

ルース・オゼキ 田中文 早川書房(2014)

昨年ここで紹介した崔実（チェシル）の『ジニのパズル』を読んだ後、この米
国小説“A Tale for the Time Being”を原文で読みはじめた。家に帰る、本を開
く、世界を想う。寝る前の一読ゆえ、こうした日々が数ヶ月も続いた。2つの小
説はとてもよく似ている。太平洋をはさむ両岸が舞台であり、打ち寄せる波の如
く、女子高生へと世界のしわよせがいく。

ここでの世界とは時間がらみでもある。『ジニのパズル』もそうだったが、歴史
のひずみが主人公を取り巻くのだ。サブカルと宮澤賢治が、交互に女子高生 Nao
の日常に立ち現れたりもする。見知らぬ女子高生へと押し寄せる時空間の褶曲か
ら、もう1人の主人公 Ruth は『正法眼蔵』にある「有事（うじ）」(the time
being)の哲学を引き寄せていった。

地球と天空のはざまにある生と死の瞬間。宮城、秋葉原、カナダの離島がつな
がり、特攻隊、911、311 がつながる瞬間に立ち会えるのは、この小説でしかな
い。

山之口獏詩集

山之口獏 高良勉編 岩波文庫(2016)

山之口獏は那覇市東町の名家に生まれた。しかし、幼少期、銀行に勤めていた父が失職し、自らも退学処分になるなど「エリート」コースから外れていく。そして、単身本土に渡り、東京での極貧生活が始まった。野宿するとき、腹が減ったとき、彼は空を見上げるしかなかった。そして、獏は詩人を目指していく。ところがちっとも詩が書けなかった。そんなとき、立ち寄った喫茶店でウエイトレスに一目惚れし、恋慕は宇宙まで広がって、詩が生まれた。その詩想の気宇壮大なこと。思わず心が緩んでしまう。うれしくなるとすぐに「地球」を語り始める癖を、彼は気づいていたのだろうか。天へと吹き上げられた愛が、星のようなコトバとなって天から落ちてくる。愛と地球を語らせたら獏の右に出る者はいない。

プルトニウムの恐怖

高木仁三郎 岩波新書(1981)

昨秋、「仁さん」こと、高木仁三郎の遺作となった小説『鳥たちの舞うとき』（工作舎、2000）をようやく読むことができた。末期癌におかされ、病床での口述筆記だったという。これを読みながら、彼の小説では『プルトニウムの恐怖』が一番面白いと思った。核化学の専門家で原子力事業にたずさわったことのある仁さんは、核の威力に心底、脅えた人だった。本書は、核廃棄物をどこに、どのように捨てたらよいのか考えあぐねた結果、SF小説のようになった本だ。世界の情報を取り入れながら最終処分計画を思案するうちに、地底深くに埋められるのか、宇宙には捨てられないのかと、仁さんの空想は駆り立てられていく。総じてSF小説は苦手なのだが、本書のように必要から生まれたSFは読むに耐えうる。核のゴミという現実がもたらした本書の空想は、35年以上経っても残念なことに古びていない。それは議論が頓挫し続けているからなのだ。

Space

Tim Vicary Oxford University Press(2013)

オックスフォード大学出版の英語学習本(Oxford Bookworms Library: Factfiles Series) の一冊。平易な英語で書かれた素敵な入門書。We are all made of stardust! おまけを二冊。星と音楽をモチーフにした萩尾望都の『銀の三角』(白泉社文庫)と1970年代SFの傑作『星を継ぐもの』(ジェイムズ・P・ホーガン、創元SF文庫)。どちらもお勧めです。

2016 年度卒業・2017 年度入学記念

どこでもドアのかぎ 2017

新潟県立大学生生活協同組合

教職員フォーラム 「どこでもドアのかぎ」編集委員会 編

バックナンバーURL:<http://www.unii.ac.jp/~ktcoop/dokodemo.html>

2017年3月21日 発行